

## 序章

目まぐるしく変化する現代社会において、「やきもの」<sup>1</sup>を取り巻く状況は、例えば産業製品の多様さを見る限りでは多彩で華やかに感じられるかもしれない。日々の暮らしに欠くことのできない食器類をはじめ、浴槽やトイレなどの衛生陶器、飾り皿のような装飾器、タイルやレンガなどの建築材料、工業機器の部品類に至るまでその用途は広く、日常の周辺で多少ともやきもの（陶磁器）製品の見られないところは稀といえるのではないだろうか。<sup>2</sup>

しかし、私が対峙する現代陶芸と呼ばれる芸術表現の文脈は、原始から綿々と続く優れた歴史性や成熟した産業性を背景にしながらも、まるでその行き先を見失い、迷走しているかのように感じられてならない。

確かに戦後陶芸の動向を象徴するオブジェ表現は、用を閉ざすことによって応用から純粹への越境を試みるという前衛精神に基づいたきわめて近、現代的なアプローチであったといえる。しかし一時代を築いたそのような純粹、自律志向も70年代にはその潔癖さゆえに行き詰まりを感じさせるようになり、その後（特にポストモダン以降）は造形表現としてのアイデンティティを明確に提示することが困難になってきたことも否めない事実である。

21世紀を迎えますますます多様化していく今日の芸術表現において、果たして「やきもの」はどのような位置を取り、現代陶芸は造形表現としての確かな固有性をどのように示していくことができるだろうか。

そのような状況を背景に、私が「やきもの」に内在する造形表現としての固有性と、新たな可能性を導き出す有効なアプローチとして注目した要素が「うつわ」である。しかしこれは実用性のみを判断基準とする器物としての捉え方ではない。

素材と工程の性格上、基本的に量塊的ではなく薄い板状や中空に成形される「やきもの」にとって、「うつわ」は本質的に造形の根底に存在するものであると認識することにより、「うつわか、オブジェか」という二者択一的な在り方を越えた次元でそれぞれの要素を共存させ、そこから今日的な造形性の獲得を目指すものである。

そして「やきもの」と「うつわ」の関係性を通じて人類が歴史の中で積み重ねた経験

や培ってきた感覚に目を向け、さらにそこから作者自身の見解を見出すことが出来たならば、それは今日のやきもの表現が他の芸術表現に感わされることなく、より大きな文脈の中で展開していくための有効な基軸になり得るのではないだろうか。私はその可能性を、自身の作品制作によって思索していきたい。

第1章では、前衛 - 現代陶芸のこれまでの経緯を、主に日本を中心として振りかえる。やきものにおけるモダニズムの方向性や、70年代以降顕著になる日本のクレイワーク、ポストモダンの展開を見つめ直すことで、私たちの世代の前提として存在している時代の流れの確認と現在の現代陶芸が置かれた状況を考察する。

第2章では、アメリカ現代陶芸のポストモダンの展開や、縄文土器の造形にみるやきものの神秘性を比較対象にしながら、その発生から密接な存在である「やきもの」と「うつわ」の関係性について考察を進めていく。そして、私の考える「うつわ」の捉え方が、「やきもの」を説得力ある造形表現として展開させる「発想の起点」に為り得る可能性を思索する。

第3章では、自作の展開において現在の基準点と位置づけている作品『Lattice receptacle-01』の制作に至るまでの経緯や発想の展開、制作のプロセスを中心に考察を進めることで、自身の足元を確認し、これまでの試みに明確な輪郭を与える。

第4章では、「Lattice receptacleの造形システム」と、磁器特有の透光性との関係から作品にもたらされる「光の変化」を自作の新たな契機とし、現在取り組んでいる「光の受容器」としての展開について、それぞれの実作品を例に挙げ、考察を進めていく。

---

#### 註

<sup>1</sup> 本稿では「やきもの」という語を、土を主原料に焼成されてつくられた造形物、及びその行為の総称として使用する。また「陶磁器」を陶器、磁器、炆器、土器の四種類を指す語として、「やきもの」と比べ若干狭義の意で使用し、「陶芸」を近代以降に確立する個人作家の概念に基づいた芸術性のあるやきもの表現行為、及びその作品を指す語として使用するが、これらも広義において「やきもの」に含むものとする。

<sup>2</sup> 『美術手帳 4月増刊 土と火 陶芸 クレイワーク』11頁（美術出版社 1981年）参照